

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 20 日現在

機関番号：47110

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500575

研究課題名（和文）スポーツ・リテラシー形成と学びの履歴・生活スタイルに関する国際比較研究

研究課題名（英文）International comparison research of the relationship between sport literacy and student's learning career in PE, life style

研究代表者

鐘ヶ江 淳一（KANEGAE JUN-ICHI）

近畿大学九州短期大学・保育科・教授

研究者番号：90185918

研究成果の概要（和文）：

体育授業において子どもたちが獲得する学習成果は、彼らが授業に臨む「学習への構え」に規定されており、さらにその「学習への構え」は教師が発揮する「指導性タイプ」によって規定されているとする関係が見いだされた。そして、「学習成果」、「学習への構え」及び「指導性タイプ」の間には、より高い学習成果を生み出す三者関係（正のスパイラル）と、逆に学習成果の獲得を阻害する三者関係（負のスパイラル）が存在することを実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

We made sure the following is empirical; 1) the learning achievements acquired are defined by students' posture to learning, 2) the posture to learning is defined by the type of teacher's leadership, and 3) the trilateral relations between these elements have two aspects, one of the relations develops a higher learning achievement, and the other relation avoids students acquiring learning achievement.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：スポーツ・リテラシー、学びの履歴、生活スタイル、スポーツ観、学校外活動

1. 研究開始当初の背景

今日、人々が人間らしく豊かな生活を享受する上で「スポーツ・リテラシー」は文化的教養の一つとして欠くことのできないもの

となっている。しかし、急激な生活様式の変化（その典型が幼児期以降の「遊びの変質」のもと、児童・生徒の体力・運動能力そしてコミュニケーション能力の低下などが深刻

な問題として顕在化し、「スポーツ・リテラシーの土台の崩れ」の様相を呈している。こうした中、体力・運動能力が高い子どもと低い子どもとの格差の拡大、体力・運動能力が低い子どもの増加傾向に言及した中央教育審議会答申（2002）を契機として、「二極化」傾向の克服が、指導要領改訂に関わった論議の一つとして展開されてきた。こうした傾向は、日本ばかりでなく、「東アジア型教育」（佐藤；2000）が推進されてきた韓国、中国、台湾などの東アジア諸国においても同様に認められ、そうした課題解決に向けた取り組みが体育カリキュラム改革の基幹をなしている。韓国の第7次ナショナル・カリキュラムでは、健康・体力問題への対処として「学校内スポーツクラブの活性化」が重点課題とされている（文部科学省；2007）。また、九年一貫課程綱要のもとでの体育カリキュラム改革が進行している台湾でも、「生徒のスポーツへの参加」「生徒の運動習慣」に関わった大規模な実態調査を実施しながら、「ひとり1スポーツ、1学校1チーム」を推進する施策がとられている（台湾教育部；2007）。

しかし、海野（2006）、鐘ヶ江ら（2005）が実施した調査では、中教審答申の指摘や韓国、台湾の動向にみられる体力・運動能力の低下のみならず、児童・生徒の情意的な側面での授業成果、体育に対する価値意識、さらには、心の健康や社会的スキルにおいて「発達的二極化」現象（＝育ちそびれの全般化）が示唆された。さらに、教科・学校外での組織的なスポーツ活動への参加の有無やその頻度によって児童・生徒の育ちや体育授業での学びに有意な差異が認められ、家庭の文化資本の格差を反映している、もしくは、今後、反映していく可能性も示唆された。こうした結果は、教科・学校外での運動・スポーツ経験の持つ教育的意味を再確認すると同時に、

「スポーツ享受の平等性」の観点から、そうした経験をもたない児童・生徒に対する教科学習の場における学力補充（または、学び直し）の必要を示唆しているようにも思われる。

2. 研究の目的

そこで本研究は、生涯スポーツが到来する時代にあつて、児童生徒の育ちと学びの履歴の実態と生活スタイル（遊びや教科・学校外活動）との関連に焦点化した国際比較調査を実施し、スポーツ・リテラシー教育を制度設計していく上での基礎資料を得ることを目的とするものである。そのために、以下の3つの課題を設定した。

（1）調査対象とした国・地域の幼児・児童・生徒が日常、どのような運動・スポーツ生活（する・観る・読む）の現実であり、また、学校におけるスポーツ教育の内実（授業とカリキュラム）はどのようなものかについて、生活スタイル（遊び、塾、スポーツクラブなどの学校外活動）との関連から精密な実態把握をすること

（2）調査対象とした国・地域の幼児・児童・生徒の「学びの履歴」と「生活スタイル」との相互関連について調査を実施する。

（3）それらの結果を国・地域間で比較分析を行い、「国境を超えて共通に存在する教育課題」と「それぞれの国と地域に固有の教育課題」とを識別すること

3. 研究の方法

（1）体育授業における「学びの履歴」に関する実態調査

体育授業における「学びの履歴測定バッテリー」を開発し、これを用いて、日本の小学校、中学校、高校における体育授業の中で児童生徒がどのような学びの経験をしているか、その学びの経験内容と学習成果との関連を明らかにしようとした。

2007～2010年にかけて中学1年生789名、高校1年生1441名、大学1年生2556名を対象とし、直前の学校階梯での体育授業を回想しながら、そこでの経験内容と意識を回答する質問紙調査を実施した。回収された5915名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた4786名を分析対象とした（有効回答率80.9%）。その結果、「学習成果」次元（「実践的知識の理解」「楽しさ感得」「共同・共感」「運動有能感」の4因子）、「学習への構え」次元（「教え合い」「規律遵守」「自覚的学習」「献身」「積極的学習」の5因子）、「教師の指導性」次元（「肯定的相互作用」「学び方指導」「学習規律」「共感的雰囲気」「緊張感」「認知的指導」の6因子）の3次元で構成される「学びの履歴測定バッテリー」を作成した。

さらに、日本における分析結果に基づいて、「学びの履歴測定バッテリー」の韓国語、英語、台湾語、中国語への翻訳作業を実施し、現地の連携研究者とともに、論理的妥当性の検討を実施した。

(2) 「スポーツ観」形成の実態調査

学校体育における「学びの履歴」や学校外での組織的スポーツ活動経験（スポーツ少年団、スポーツクラブ、運動部活動など）は、個々人のスポーツ観の形成に大きく影響を及ぼしているものと推察される。そこで、大学生を対象とした「スポーツ観」形成の実態調査尺度を開発した。福岡県A大学など3大学の大学1年生を対象に「スポーツに対する意識調査」を行った。回収された656名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた479名を分析対象（有効回答率73.0%）とし、「社会的有用性」「陶冶性」「日常的有用性」の3因子からなる「スポーツ価値意識尺度」を作成した。なお、各因子の信頼性係数の範囲は、.72から.81であり、高い内的整合性

を有していた。また、「スポーツ像」の分析カテゴリーとして「勝利志向」「鍛錬・精神主義」「伝統」「努力志向」「自己志向」「ジェンダー」「レク志向」「協力・共同」「規範意識」「科学主義」「環境」「技術・戦術」の12カテゴリーを抽出した。

4. 研究成果

(1) 日本の初等教育における体育授業の現状

①学習成果と学習への構えとの関連

「学びの履歴測定バッテリー」の学習成果次元と学習への構え次元で男女間に差異が認められた。また、児童の体育授業に対する学習への構えに関し、クラスター分析を行ったところ4つのタイプが析出され、各タイプ間で学習成果に有意な差が認められた。すなわち、学習成果への達成度、体育授業への好嫌、教科への有用さの認知の観点から、いずれも「学習志向型」の学習への構えタイプが高く、「授業回避志向型」が低かった。

②学習への構えと教師の指導性との関連

教師の指導性次元の因子得点をもとにクラスター分析を行った結果、「教えー学び乖離型」「授業不成立型」「教育内容不在型」「自己ペース型」「教えー学び融合型」の5つのタイプが析出された。さらに、教師の指導性タイプのうち、「教えー学び融合型」は、70%近くの児童に「学習志向型」の構えを形成し、この望ましい学習への構えが高い学習成果をもたらし、さらに、「教科体育への有用さの認知」を高めていることが示唆された。このように、教師の指導性タイプ、児童の学習への構えタイプ、学習成果との三者関係には、高い学習成果を生み出す「正のスパイラル」と、これとは逆の「負のスパイラル」を生起される場合があることが確認された。

(2) 日本の中等教育における体育授業の現

状

①学習成果と学習への構えとの関連

学習成果次元を構成する4因子すべてで男女間に有意な差が認められた。また、中学、高校別にみてもすべての因子で性の主効果が認められた。

学習への構え次元では、「教え合い」「規律遵守」「自覚的学習」「積極的学習」で男女間に有意差が認められた。また、中学、高校別にみても、すべての因子で性の主効果が認められた。さらに、学習への構え次元についてクラスター分析を行った結果、「学習拒絶型」「ひとり学び型」「消極的参加型」「学習志向型」「息抜き志向型」の5タイプが析出された。男女別の構成比をみると「学習拒絶型」「ひとり学び型」「消極的参加型」で男女差が認められた。学習への構えタイプ別の学習成果得点をみると、「学習志向型」が最も高く、「学習拒絶型」が最も低かった。さらに、学習成果の因子別得点をみると「学習志向型」がすべての因子で最も高い得点を示した。学習への構えタイプ別に体育授業の好き嫌い度および教科の有用さの認知度をみると、いずれも「学習志向型」で最も高く、次いで「息抜き志向型」「ひとり学び型」となっていた。逆に、「学習拒絶型」「消極的参加型」では、好き嫌い度および教科の有用さの認知度いずれの得点も低得点だった。

②学習への構えと教師の指導性との関連

教師の指導性次元では、「学び方指導」以外の因子で性の主効果が認められた。

教師の指導性次元についてクラスター分析を行った結果、「指導放棄型」「教え-学び融合型」「強圧指導型」「学習不成立型」「学習支援型」の5タイプが析出された。また、男女別の構成比をみると、「学習不成立型」を除く4タイプで男女差が認められた。教師の指導性タイプ別の学習成果得点をみると、

「教え-学び融合型」が最も高く、「指導放棄型」が最も低かった。さらに、学習成果の因子別得点をみると「教え-学び融合型」がすべての因子で最も高い得点を示し、次いで「学習支援型」となっていた。また、「指導放棄型」はすべての因子で最も低い値を示していた。教師の指導性タイプ別に学習への構え得点をみると「教え-学び融合型」と「学習支援型」は、合計得点および因子別得点ともに高得点であった。また、これに続く「強圧指導型」「学習不成立型」では、唯一、「自覚的学習」因子のみ「強圧指導型」が有意に高かった。

教師の指導性タイプがどのような学習への構えをつくり出しているのかを分析した結果、「教え-学び融合型」では「学習志向型」が最も多かった。また、「学習支援型」は「学習志向型」を多くつくり出す一方で、「息抜き志向型」の割合も高かった。さらに、「指導放棄型」では「学習拒絶型」の構えを最も多くつくり出していた。

「体育の好き嫌い」度では、「教え-学び融合型」と「学習支援型」の間に有意差は認められなかったが、「教科の有用さの認知」度では前者の得点が有意に高かった。こうした結果の背景には教師の指導性の「認知的指導」因子の得点が関与していることが推察された。

(3) 韓国およびイギリスにおける初等体育授業の「学びの履歴」に関する比較研究

①韓国における初等体育授業の現状

ソウル市、プサン市、テグ市の中学1年生を対象に「学びの履歴測定バッテリー」に関する質問紙調査を実施した。回収された1828名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた1450名を分析対象とした（有効回答率79.3%）。

学習成果次元では、「実践的知識の理解」

「運動有能感」において、日本よりも韓国の得点が有意に高かった。逆に、「楽しさ感得」では、日本の得点が有意に高かった。

日本では、「学習支援型 (34.6%)」「学習不成立型 (34.4%)」の指導性タイプの割合が高かったが、韓国では「教授主導型」が33.3%と最も高い割合を示した。一方、最も割合が少なかったのは、日本は「教えー学び融合型」(6.4%)、韓国では「学習支援型 (12.4%)」であった。

②イギリスにおける初等体育授業の現状

シェフィールド近郊の中等学校1年生を対象に「学びの履歴測定バッテリー」に関する質問紙調査を実施した。回収された179名中、欠損値、誤記入のある回答を除いた149名を分析対象とした(有効回答率83.2%)。

学習成果次元では、「実践的知識の理解」「共同・共感」「運動有能感」の3因子にくわえ、合計得点でイギリスの方が有意に高い得点を示した。

児童の体育授業に対する学習の構えタイプをみると、日本、イギリスともに「学習志向型」(JPN=29.6%、UK=56.3%)の割合が最も多く、「学習拒絶型」(JPN=10.6%、UK=1.7%)の割合が最も少なかった。

③今後の課題

「学びの履歴測定バッテリー」を構成する3次元間を相関関係的に分析することにより、児童生徒の体育授業における学習成果(=学びの結果的側面)およびそうした学習成果を得るに至る学びのプロセスとそこでの経験内容(=学びの過程的側面)を詳細に把握することが可能になるものと期待される。すなわち、教師教育、授業づくり、カリキュラム改革のツールとして使用することで有効な実証的根拠を得ることが期待できよう。

しかし、今回抽出された因子の中には、信

頼性係数 α 値が.70を割る因子が5因子含まれている。さらに、この5因子はいずれも2項目で構成されており、より信頼性の高い、因子間のバランスのとれた尺度に改善することが求められる。また、社会的・文化的・制度的背景を異にする国・地域間で比較が可能な、水平的研究に資するツールへとバージョンアップしていくことも今後の課題となる。

(4) 組織的スポーツ活動経験と「スポーツ観」との関連

組織的スポーツ活動経験の有無、在籍年数および在籍パターンの差異は、総じて、大学生のスポーツ価値意識、スポーツ像に対し、強い作用を及ぼしているとの結果は見出せなかった。スポーツの価値意識の「日常的有用性」、スポーツ像の「勝利志向」については、組織的スポーツ活動経験を有する大学生の得点が高い傾向にあった。一方で、活動経験のない大学生は、スポーツ像の「レク志向」の得点が高い傾向にあった。

スポーツに親しむ機会や活動を行う場としての組織的スポーツ活動の連続性や継続性に対する配慮や仕掛けを学校階梯間、学校・地域間で構築していくことの重要性が示唆された。経験の有無、在籍年数などの量的な要因にくわえ、大学生の組織的スポーツ活動に関わった質的な側面(所属目的、没頭度など)についても検討を加えることが求められる。今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

① 鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・黒川哲也, 現代日本における小学校体育授業の現実; 学習成果・学習への構え・教師の指導性タイプとの関連から, 日本スポーツ教育学会第30回記念国際大会プロシーディング, 査読有, 2010年, pp.311-316.

② UNNO YUZO, NAKASHIMA NORIKO, KUROKAWA TETSUYA, KANEGAE JUN-ICHI, Urgent Issue in

Condition of Physical education Class in East Asia: Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE, The international Conference for the 30th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education Proceeding, 査読有, 2010, pp.286-288.

③中島憲子・海野勇三・村末勇介・鐘ヶ江淳一・口野隆史, スポーツ・リテラシー研究への一視角; スポーツに対する価値意識とスポーツ観に関する予備調査から, 中村学園大学・中村学園短期大学部研究紀要, 査読有, 第42巻第1号, 2009年, pp.137-146.

[学会発表] (計15件)

①YUZO UNNO, Urgent Issues in Actual Conditions of Physical Education Class in East Asia: Inter-School Stage Disconnection, Gender Bias and Sense of Value to PE, The 2nd International Conference of Korean Society for Health Education and Promotion, Oct.22.2011, Korean National Sport University

②中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一, 日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(1); スポーツ価値意識のタイプとスポーツ像との関連, 九州体育・スポーツ学会第60回記念大会, 2011年8月27日, 名桜大学.

③海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一, 日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(2); 勝利志向性とスポーツ観との関連, 九州体育・スポーツ学会第60回記念大会, 2011年8月27日, 名桜大学.

④鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子, 日本の大学生におけるスポーツ観形成の実態(3); 組織的スポーツ活動経験とスポーツ観との関連, 九州体育・スポーツ学会第60回記念大会, 2011年8月27日, 名桜大学.

⑤海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子・黒川哲也, 体育授業における生徒の学びの履歴を把握する方法の開発, 日本体育学会第62回大会, 2011年9月27日, 鹿屋体育大学.

⑥中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也, 日本における中等体育授業の実態(1); 学習成果と学習への構えとの関連, 日本体育学会第62回大会, 2011年9月27日, 鹿屋体育大学.

⑦鐘ヶ江淳一・海野勇三・中島憲子・黒川哲也, 日本における中等体育授業の実態(2); 学習への構えと教師の指導性との関連, 日本体育学会第62回大会, 2011年9月27日, 鹿屋体育大学.

⑧中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也・口野隆史, 韓国における初等体育授業の現状; 子どもへの学びの履歴調査から, 日本スポーツ教育学会第31回大会, 2011年11月13日, 兵庫教育大学.

⑨海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子・黒川哲也・口野隆史, イギリスにおける初等体育授業の現状; 子どもへの学びの履歴調査から, 日本スポーツ教育学会第31回大会, 2011年11月13日, 兵庫教育大学.

⑩海野勇三・中島憲子・鐘ヶ江淳一, 大学における体育教師教育の課題(1); 特に指導観の自己形成をめぐる, 九州体育・スポーツ学会第59回大会, 2010年8月28日, 鹿児島女子短期大学

⑪松崎大輔・海野勇三・中島憲子, 中学・高校生のスポーツ観形成の実態; 東アジア地域の比較分析を中心に, 九州体育・スポーツ学会第59回大会, 2010年8月28日, 鹿児島女子短期大学

⑫鐘ヶ江淳一・口野隆史・中島憲子・海野勇三・徳光哲生, 体育科における幼保・小接続に関する一考察, 日本体育学会第60回記念大会, 2009年8月26日, 広島大学.

⑬中島憲子・海野勇三・鐘ヶ江淳一・黒川哲也・口野隆史, 北京市近郊(中国)における体育授業およびカリキュラムの現状と課題; 児童・生徒への複合的実態調査の結果から, 日本体育学会第60回記念大会, 2009年8月26日, 広島大学.

⑭海野勇三・黒川哲也・中島憲子・鐘ヶ江淳一・口野隆史, 「東アジア型」体育授業とカリキュラムの改革課題; ジェンダー、階梯間接続および教科への有用さの認知に着目して, 日本体育学会第60回記念大会, 2009年8月26日, 広島大学.

⑮海野勇三・鐘ヶ江淳一・中島憲子, 中学校体育授業における生徒の学びの履歴に関する研究, 九州体育・スポーツ学会第58回大会, 2009年9月6日, 崇城大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鐘ヶ江 淳一 (KANEGAE JUN-ICHI)
近畿大学九州短期大学・保育科・教授
研究者番号: 90185918

(2) 研究分担者

中島 憲子 (NAKASHIMA NORIKO)
中村学園大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00301721
海野 勇三 (UNNO YUZO)
山口大学・教育学部・教授
研究者番号: 30151955

(3) 連携研究者

口野 隆史 (KUCHINO TAKASHI)
京都橘大学・文学部・教授
研究者番号: 60192027
黒川 哲也 (KUROKAWA TETSUYA)
宮城教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 50390258